



平成灯台守

2018. 4 月号

発行/御前埼灯台を守る会 事務局/〒御前崎市白羽 1216

御前埼は“おいら岬”だと思ってた

1～3 月に開設した日曜灯台資料館は、好天に恵まれ、風は強いものの富士山や伊豆の利島、新島、敷根、神津島も良く見え、大勢のお客さんに喜んでいただくことができた。入館者は 1,797 人であった。



熱心に写真や資料に見入っている人に声を掛けると、貴重な話を聞くことができた。

灯台資料より建設当時の役人だった「今武高光」の名前を発見し、娘がその子孫のところに嫁いだという方や御前埼は“おいら岬”という所だと思い込んでいたが、間違いを知ったという人。

『喜びも悲しみも幾歳月』の映画も年配者の関心が高く、小田原市在住者は御前埼ロケで役者や関係者を何回も車に乗せて走ったという。八王子市の女性は父親が灯台守で、石狩灯台ロケでは母親がエキストラ出演したこと、住んでいた官舎が写ったこと、全国を渡り歩いた灯台守生活などを懐かしく話してくれた。

灯台巡りで御前埼に来たという人が案外多く、妻の退職を機に御前埼から始めるといふ岐阜県の人、これから鹿児島までの灯台を訪ねるといふ東京の夫妻など、灯台女子ならぬ灯台夫婦も目立った。全国の灯台 50 選中、35 カ所を回ったという人もいた。

平成 29 年度（4 月～3 月）一年間の灯台資料館の開設日数は 47 日、入館者は 9,383 人だった。

あんどん 行灯型だった江戸時代の灯台

現在の西洋式灯台が作られる以前の灯台はどのようなものであったのだろうか。

旧御前埼村の庄屋に残されていた文書によると、1635 年（寛永 12）に江戸幕府により「見尾火灯明堂」（みおびとうみょうどう）が現在地に設置されていた。

建物の大きさは、縦横 3.6m、高さ 2.5m、ちょうど八畳間の大きさで、前と横三方に板戸が付けられ、下床には風で飛ばされないよう石が詰められていた。

このお堂の中に 1.2m 四方の障子紙貼りの行灯（あんどん）を置き、村人が毎晩交替で火の番をしていたという。

灯油、灯心、障子紙等入用の全ては幕府から調達され、灯油は一晩に 3 合を要した。建物は、潮風や烈風にさらされるため傷みも早く、9～10 年毎に修繕をしていた。

障子張りの行灯が本当に役にたったのだろうか、今の灯台の光を知っている我々からすると想像できないものがある。

灯台の入口手前の左脇に当時あ

ったものと同じ大きさの灯明堂が復元（写真）されている。

以前、この行灯を使って実験したことがある。その日は小雨に煙る夕べであったが、2 km 余り離れたところからオレンジ色の灯りがボーッとではあるが確認できた。

漆黒の岬角に見える小さな灯明堂の灯りに船人たちがどれほど安堵したのかわかるような気がした。

by masatoshi

